

ベトナム社会主義共和国の言語教育状況に関する考察

—ロシア語教育とドイモイ改革を中心に—

Foreign Language Education in Vietnam

田原 洋樹

TAHARA Hiroki

Abstract: In Vietnam, the teaching and learning of foreign languages have experienced many changes. Foreign language education in the country reflects its political winds and business climate. This article shows foreign language policy and its educational situation in the Socialist Republic of Vietnam, especially the changes as a result of the Russian impact on the language education from the beginning of “Doi moi” to today.

中等教育や高等教育の場における外国語の取り扱い、およびこの根拠となる外国語教育政策は、政治・経済など社会事情と不可分な関係にある。「何語を学ぶのか」という選択は学習者個人の関心に基づくことは当然であるが、他方で社会的要因もきわめて重要である。

そこで本稿では、ベトナム社会主義共和国(以下、ベトナム)の言語教育について、特にドイモイ改革前後のロシア語教育の衰勢に的を絞って考察してみたい。

Keywords: Russian, the Soviet Union, Doi moi

ロシア語 ソ連 ドイモイ

1. 「ロシア語」教育と社会背景

1.1 はじめに

1975年4月にベトナム戦争が終結し、新たに国づくりをはじめたベトナム社会主義共和国(以下、特段の必要性がないときはベトナムと表記する)にとっては、ソ連が国家建設のモデルであった¹。社会基盤の整備や工業化の「お見本」をソ連に求めた以上、1980年代のベトナムで外国語の主役を担っていたのがロシア語であったことは蓋し当然である。この時期、中等教育、高等教育でロシア語教育が盛んに行なわれ、また国の将来を背負う若者や学生は旧ソ連や旧東欧諸国など、いわゆる東側陣営諸国にある高等教育機関に送り込まれ、高い専門性を身につけた²。特に

85年、86年前後には毎年650人程度がソ連に、500人程度が旧東欧諸国に留学していた。留学に先立って、ロシア語運用能力を習得することは必須であり、ハノイやホーチミン市にはロシア語やロシア事情を集中的に教育する「予備教育コース」が設けられていた。

かつて、ベトナムではロシア語が外国語として最右翼に位置していたのである。

1.2 ベトナム社会主義共和国建国前後の外国語教育状況

ベトナム社会主義共和国建国以前から、ベトナム民主共和国(北ベトナム)ではロシア語教育が実施され、ベトナム人はソ連や中国に留学していた。まず、1945年11月のベトナム国家大学におけるグエン・ヴァン・フィエンの演説を見ておきたい。

今日の大同世界において、国が大きくとも小さくとも、いかなる国も完全に孤立して生きることは出来ない。従って大学では、1945年、55年を、文化に重要な外国語である中国語、英語、ロシア語³に特別な注意を払う⁴。

8月革命直後から、中国語、英語、ロシア語を重点的に教育する施策をとってきた。「社会主義ベトナムの建設と防衛」に資する外国語として、国連公用語のうちの4言語、すなわち英語、ロシア語、中国語、フランス語を選択した⁵。

58年には、既に先行して開設されていたロシア語や中国語の教員、通訳養成コースにあわせて、英語やフランス語の学科がハノイ師範大学に開設された。ロシア語、中国語、英語、フランス語が次第に中等教育、高等教育に浸透していった⁶。国家建設のモデルをソ連に求め、国家の将来を担う人材の育成がソ連で行なわれていたので、ロシア語の重要さは際立っていた。ソ連への留学のみならず、国内の諸機関に派遣されたソ連人専門家から専門的知識を得て業務を行なうためにもロシア語が必要であった。

ソ連留学の第一陣は51年である⁷。派遣留学生の数は年々増加する⁸が、56年に初めて減少し、翌57年にはゼロになった。57年、58年と2年にわたる「中断」の背景にはフルシチョフの「スターリン批判」がある。なお、同時期に中国への留学生送り出しも激減するが、これは中国が百家争鳴政策によって教育現場も安定を失っていたことが大きな理由である。留学生派遣という国策が、派遣先の内政事情に左右されていた苦悩を見ることができよう⁹。

さて、戦後のベトナムでは、ソ連や東欧諸国の、いわゆる東側陣営との友好協力関係が重視されたことはいうまでもない。ロシア語はベトナム戦争の終結、社会主義国家の建設という背景を追い風にして、筆頭外国語の地位を盤石にしていた。その当時のベトナムの世界認識について、白石は「ベトナムの抱く世界認識・国際関係観においては、世界を革命勢力と反革命勢力に二分する革命的、イデオロギー的観点が中核にあり(後略)」と述べている¹⁰。革命勢力の中心であるソ

連の言語ーロシア語ーこそが、ベトナムの発展に必要であり、のみならず革命勢力がやがて世界の主人公になった暁には国際社会での共通言語になる、という言語観が窺えるのである。

1.3 ロシア語のインパクト

ロシア語がベトナム語に与えた影響も無視できない。ソ連の社会システムを取り入れるのだから、それに付随して諸々の用語がベトナム語に流入してきた。「農民」を指す muzik、「寄宿舍」を意味する dom¹¹などはベトナム人の生活に密着したロシア語由来の語であった。「あった」と書いたのは、実はこれらの語は既に死語と化してしまったのだ。現在のベトナムで最も普及しているベトナム語辞典のひとつであるホアン・フェー編纂の Tu dien tieng Viet (ベトナム語辞典) 2005年版にはこれらの語は収録されていない。

ロシア語のインパクトを語彙レベルで考察してみると、上記2語のように音ごとベトナム語に取り入れたものと、意味をベトナム語に訳して取り入れたものがある。後者は、一見、純粋なベトナム語のように見えるが、ロシア語の意味をベトナム語で解釈し、造語したものである。このような工夫により、ベトナムはロシア語の政治経済用語、科学技術用語をベトナム語に取り入れていった。専門用語を自前で持つことは、ベトナムの科学技術、学問研究の水準の向上にも直結した。

ベトナム語は孤立語である。修飾・被修飾は語順が重要な働きをし、被修飾語が修飾語に先行する。いずれも漢語由来の xa hoi (社会)、chu nghia (主義) に関して、chu nghia xa hoi は「社会主義」という名詞であり、xa hoi chu nghia は「社会主義の」という形容詞である。こうした造語法はベトナム言語学の分野でしばしば取り上げられているものの、語彙の問題は広範囲にわたり、また記述しておかないと早晩消え去ってしまう恐れがある。ロシア語、ベトナム語に精通した研究者による言語学的見地からの研究がなされるべきである。

2. ドイモイ改革と外国語教育

2.1 ドイモイ改革前後のロシア語教育

戦後、ベトナムでは社会主義による国家建設が進められた。76年の第4回党大会では工業重視の発展政策が採られた。計画経済による経済活動の営みが全国で始まった。南部で農業の集団化が進められたが、現実には成果は上がらず、農業生産は低下した。農民は集団に参加せず、農作物を都市部の金持ちに売っていたのである。つまり、農業を集団化するためには、都市部の商工業を社会主義経営に移行させなければならなかったのだ¹²。これにより、私企業の廃止、次いで預金封鎖が行なわれ、私営セクターが社会主義に「改造」されたのである。

南部における外国語も、ベトナム共和国時代の英語からロシア語にシフトしていった。私営セクターの「改造」には民間の語学学校の閉鎖も含まれ、英語は都市部の限られた学校で教授される

のみとなった。たとえば、ホーチミン市では、75年には毎年60人だった総合大学の英語専攻の定員が85年には10名程度にまで減った¹³。

しかし、急激な社会主義化や計画経済化は容易には受け入れられなかった。旧南ベトナムで要職にあった者や軍人、公安関係者は「改造キャンプ」に収容されて、思想の再教育を施された。また、その子弟には進学や社会での出世、登用などで不遇され、政治体制にはもちろん、経済的に、さらには文化生活の劣悪化に嫌悪した人々がいわゆるボートピープルとして出国した。他方で、カンボジア進攻によって国際機関からの支援は停止し、中越戦争により、中国の脅威もまざまざと見せつけられることになった。

国民経済は疲弊しきっていたが、この時期に文字通り「助っ人」となったのがソ連であり、ソ連からの経済援助はベトナムのGNPの約20%に達していた。ソ連の援助は不可欠で、ロシア語はベトナムにとって生命線に直結する外国語であった。78年度にはホーチミン総合大学にロシア語専攻過程が開設され、学業優秀な進学者の受け皿となった。

戦争終結から8年後の83年、首都ハノイにブースキン研究所が開設された。研究所ではロシア語研究、ロシア語教育の研究、ロシア文学研究が行なわれた。なかでもロシア語教育についてはベトナム人専門家とソ連から派遣された専門家が教材開発に従事したり、また「ロシア語オリンピック」と称するロシア語能力競争大会を組織したり、大学、中等教育機関、軍関係の教育機関などにおけるロシア語教育の、いわば総本山となった。当時、ベトナムでは中等教育の外国語もほとんどがロシア語であったので、大学でのロシア語教育のレベルは高かったという。

他に、ソ連や東欧諸国へ留学するものを対象とした事前教育機関もあり、徹底した語学教育が施されていた。ベトナム国内の大学入学試験において上位得点にある者が留学生候補に選ばれた。ソ連行きの予備コース、東欧諸国行きの予備コースともに1年間の課程である。ソ連行きはハノイ、サイゴンに、東欧行きはハノイに集結し、予備教育を受けた。国内入学試験で受験した大学、専攻と派遣先での専攻が一致しない場合も少なからずあった¹⁴。

2.2 ロシア語の衰退

ロシア語が筆頭外国語であった時期にはロシア語のテレビ番組やラジオ番組も放送されていた。国産の紙の質がまだよくない時代に、上質なソ連製のカードやノートブックは、大学生たちにとって洒落た文房具であった。

筆者がベトナム語を学習し始めたのは91年春で、この時のベトナム人教授はロシア語とフランス語が話せたが、英語は使えなかった。ハノイ総合大学発行のベトナム語教材を使用した。会話にはソ連を意味する Lien Xo という語がしばしば登場した。自己紹介の例文はソ連人、ラオス人がそれぞれベトナム語で会話するもので、当時の世相を反映していて、極めて興味深い。外国語教育、語学教材に投影された国際情勢への関心は、思えばこの頃から始まっていたのかもしれない。

い。

また、筆者は92年春に初めてベトナムを訪問した。これはロシア語教育やソ連製の文房具などが輝きを残していた「最後」の時期であった。訪問中に親交を持った友人はホーチミン市の法律大学の学生であった。大学での外国語はロシア語であると述べ、ロシア語を知らない筆者とはベトナム語で話すことになった。彼は、ある社交の場で大学の仲間を紹介し、同時に傍らにいた教員を「(自分が通う大学の)ロシア語の先生」と紹介してくれた。

この「ロシア語の先生」との再会は偶然で、しかも驚異だった。94年の夏ごろ、ベトナム航空のオフィスで偶然にこの先生を見かけ、「ロシア語の先生、こんにちは」と挨拶をした。名前を失念していたが、顔と仕事は覚えていたので、いささか間抜けな感はあるが、こう言った。彼は「自分はどうロシア語の先生ではない」と言い、筆者は困惑した。ややあって、「今は英語の先生だ」と聞いたときは混乱した。なぜロシア語の教員が2年間で英語の教員に「変身」したのか。

ベトナム語で「刷新」を意味するドイモイ政策は86年の第6回党大会で採択され、改革がスタートした。経済社会生活の刷新が眼目であったが、外国語教育にも変化があった。それまでのように90%以上の学生が、なかば自動的にロシア語を学習していたのに対し、学習言語の選択が可能になったのである。ドイモイでは外資の役割に大きな期待が寄せられていた¹⁵ので、合弁や外資企業の参入が国策として奨励された。こうした投資環境の変化は、80年代後半から90年代初頭にかけての「ロシア語から英語へ」の転換を促進した。

しかし、それ以上に潮流の大変化を起こしたのは東欧諸国における共産党政権の崩壊、その後のソ連の経済不振、さらにソ連の解体であった。ソ連はベトナムの経済建設を支援し、78年には「ソ越友好協力条約」を締結し、最盛期の87年には15億米ドル以上の経済援助を行なった¹⁶。この経済援助には、既述した人材開発も含まれ、ゆえにソ連に多くのベトナム人が留学や職業訓練の形で送り込まれ、ゆえにロシア語が筆頭外国語の地位にあったのである。

こうした大変化のなかで、ロシア語教員は自身の担当科目が閉講になる事態を迎える。特に91年以降はいよいよクラスが成立せず、多くの教員がロシア語教員としては生計を立てることが不可能になりはじめた。そこで、彼らは英語学校に通い、英語を習得した。半年から1年の英語学習で、彼らは「英語教員」として別の教員人生をスタートしたのである。時にベトナムは英語学習ブームで英語教員が不足しており、彼らの出直しを後押しする形になっていた。英語教員になった元ロシア語教員は、筆者に対し以下のように述べた。「授業がなくなり、収入も途絶えた。多くの同僚とともに語学学校や大学の在職課程などで英語を勉強して、英語教員を目指すことにした。」「実際に英語の教員として授業を始めた当初は不安で一杯だった。つまり、自分の英語にロシア語の“におい”がしてしまうのではないかと、またそういう指摘を学習者からされはしないかという不安である。」「しかし、自分は言語が違いとはいえ、語学の教師を長年やってきたのだから、経験が助けしてくれるだろうと勇気を持って教室に向かった。」

これらはいずれも同業者としての筆者の胸に迫ってくる言葉である。

無論、学習者の方も同様である。ASEAN 加盟が迫ったころには、ソ連留学世代の官僚や幹部が英語の勉強に必死になっていた。英語の出来不出来が出世に直結するので、早朝勉強会や午後の補習などが盛んに行なわれた¹⁷。

2.3 ロシア語の断絶

90年代中盤は、もはやロシア語を学ぼうという者、学ぶ者は人民軍か公安にしかないという時代になってしまった。ホーチミン総合大学は78年設置以来の名門ロシア語教育機関であるが、95年度の新入生は10名余り、96年度には7名という危機的状況になった。そして97年には新入生不在、ロシア語教育がここで断絶した。

この「断絶」を機に、ロシア語科は教育内容の大改革を打ち出した。ロシア語と英語の2言語教育課程への転換である。5年でロシア語の学士号と英語の準学士号が取得でき、さらに1年英語学習によって英語についても学士号が取得できるようにカリキュラムを設定した。10年遅れのドイモイと言うことが出来ようか。が、皮肉にもロシア語科は、英語科を第一希望としながらも叶わなかった学生たちの受け皿になってしまった。学生たちのロシア語学習熱は低く、新カリキュラム初年の98年入学者のうち、卒業できたのは30名足らずであった。ロシア語の授業時間が1500時間を超え、2言語教育といっても授業時間はロシア語の方が多く、また大部分の入学者にとってはロシア語が初修言語であるために、相当に強い動機がないと学習が継続できないようである。

中等教育に目を転じると、最も優勢な外国語は英語で、ロシア語を学習する学生の割合は中学校で0, 2%、高等学校では1, 39%である¹⁸。

外国語教育の名門校は、ハノイのハノイアムステルダム高校、ホーチミン市ではレ・ホン・フォン高校である。レ・ホン・フォン高校にはロシア語を第1外国語とする「ロシア語クラス」が特設されており、かつてはこのクラスの優秀高校生が総合大学ロシア語科に進学してきたが、近年は7, 8名程度、しかも進学者のロシア語力は以前とは比較にならないほど「弱い」とのことである。では、ロシア語クラスの優秀高校生はどこに進学しているのか。ロシア語クラスの優秀学生は第2外国語の英語の成績も秀でており、英語系の学科に進学していく。レ・ホン・フォン高校で、あえてロシア語クラスに進む学生は、たいていの場合は父母がロシア留学経験者、いわゆるロシア世代で、ロシアの文化に興味や愛着があり、自分の子供にもロシア語を勧めている。が、父母が熱心にロシア語を学ばせても、子供は上級学校へ進学するときには、より将来性のある英語を選んでしまう。

市井の書店を見ても、英語は当然として、中国語、フランス語、日本語、最近では韓国語の教科書、辞書、自習書や学習ソフトは扱っているが、ロシア語学習の工具書はほとんど見当たらない。筆者が06年3月にホーチミン国家大学内の書店で見たロシア語文献は Cau tao tu tieng Nga hien dai(現代ロシア語の構造)¹⁹、Ngu am hoc tieng Nga(ロシア語音声学)²⁰の2冊のみであっ

た。

2.4 復興の兆しはあるか

ベトナム国内に「ロシア語の使命は終焉した」、「ロシア語は死んだ」という声があるのは事実である²¹。が、以下の数値を見る限り「死んだ」とは言い切れない、むしろ僅かながら復興の兆しを感じることができる。

現在、ロシア語専攻を持つ大学はハノイ国家大学外国語大学、ハノイ外国語大学、タイグエン大学、フエ大学、フエ師範大学、ダナン大学外国語大学、ホーチミン師範大学、ホーチミン国家大学社会科学人文大学である。また、私立大学の中ではフオンドン大学とハイフォン大学がロシア語を開講している。大学レベルでの学習者は約2200名、ロシア語教育に従事する教員は189名である²²。中等教育では、2005年9月時点で、全国の15高等学校にロシア語クラスがあり、1229名の高校生が在籍している。また、ロシア語クラス以外でも約1万人がロシア語を学習している。なお、この大半はニンビン省とタイビン省に集中している²³。

教育訓練省の統計によると、ロシアで学ぶベトナム人留学生は2004年現在で約8000名である。このうち約2000名はロシア政府ないしベトナム政府の奨学金を得て留学しているが、残りは私費留学生が占めている点は注意すべきである。ベトナムでは留学熱が高まっているが、学費や生活費に多大な金を準備しなければならないアメリカ、オーストラリア、日本などに比して、経済的に「お手軽」な留学先としてロシアが選ばれているのも一因であろう。

また、「ロシア語の使命」については、終焉したとの考えにただちに首肯するわけにはいかない。第一にベトナムの独立、自主に直結する国防、公安部門では依然としてロシア語が重要な位置にある。軍事技術や装備をロシアに依存している以上、国防や公安ではロシア語こそが外国語である。これらの部門のロシア語運用能力の低下は国防力の弱体化にも繋がりがねない。第二に、あるいは政体維持の観点からはこちらの優先順位が高いのかもしれないが、ホー・チ・ミン主席が革命の遂行にはレーニンの言葉を学ばなければならないと幾度も言っていることである。圧倒的な力と速度で普及する英語に対しての問題を投げかけた、教育戦略・カリキュラム研究院助教授のブイ・ヒエンの論文には「現在もベトナム共産党は綱領の中でマルクス・レーニン主義を指針にしている。とすると、普通教育の現場でロシア語教育を放棄するということは何を含意するのだろうか？」との文がある。

3. まとめ

3.1 ベトナムにおけるロシア語 ～断絶と温存

今まで論じたように、外国語教育と政治・経済などの社会事情は密接に関わりあっている。ベト

ナムは、その歴史的経緯から中国語、フランス語、ロシア語、英語の4言語と、その時々々の社会情勢に応じて距離を狭めたり、遠ざかったりしてきた。中国語教育については、かつて教育省が首相の承認を得ずに廃止を決め、ドー・ムオイ書記長(当時)に厳しく批判されたことがある。同時に当時のファム・ミン・ハック教育大臣に対し、ロシア語教育について、中国語と同じように勝手に廃止してはいけない旨の指導がなされた。つまり必要性に応じて、例えばソ連から技術協力を受けるためにロシア語を挙国体制で学ぶ、あるいは ASEAN 加盟に際して英語運用能力が高い官僚が必要だから英語教育に注力するというように、ある外国語を積極的に教育する施策がとられることがあっても、完全に排除する政策は上述の例を除いて見られない。だからこそ、95年から数年間のロシア語「断絶」期は相当の危機感をもって受け止められた。

ロシア本国の経済事情、ベトナム・アメリカ関係の進展、ベトナムへの外国投資状況、英語に対する世界的変化などにより、ロシア語の重要性は相対的に低下したことは事実である。が、ベトナムのロシア語話者、通訳者、ロシア研究者の水準はアジアでトップクラスに留まっていることもまた重要な事実だ²⁴。これは大切な「内力」である。根絶やしせず、温存することが現下の課題ではなかろうか。ロシア語学習がかつての勢いを取り戻すことは現実的には可能性ゼロである以上、温存しておき、いずれロシア語の重要性が少しでも高まったときに、この「内力」を発揮すればよいのである。

3. 2 今後の研究に向けて

政策面の通時的研究には若干の先行研究があったが、語彙レベルの考察を含め、ロシア語がベトナム人の言語生活にどのように溶け込み、そして定着したのか、または消滅していったのかは興味深い研究テーマである。しかし、これを丹念に扱った研究は管見の限りなかった。ソ連のインパクトについて、政治・経済分野の研究から迫ったものは多くある。今後は、言語、文学作品などの言語生活を素材にして、ロシア語のインパクト、あるいはベトナムの言語文化におけるロシア・ファクターを研究し、記述する作業を進めてみたい。

【注】

¹ 白石昌也「ソ連・東欧社会主義圏崩壊後のベトナムにおける世界と地域の認識 ―「新世界秩序」と「地域共同体」をめぐって」『経済と貿易』167号、横浜市立大学経済研究所、1994年、p42ほか。

² Do Huy Thinh, “Foreign language education policy in Vietnam: the emergence of English and its impact on higher education”, *The forth International Conference on Language and Development*, 1999, http://www.clet.ait.ac.th/hanoi_proceedings/dothinh.htm. April, 22, 2006.がある。

³ 原文では、tieng Trung Hoa(中華語)、tieng Anh-Mi(英米語)、tieng Nga(ロシア語)。以下同様に、ベトナム語での tieng Trung Hoa ないし tieng Trung は中国語と訳す。

⁴ 1945年11月15日、ベトナム国家大学の開校式における Nguyen Van Huyen グエン・ヴァン・フイエン大学部長の演説。同演説は、近年では2001年12月31日付のベトナム共産党機関紙 Nhan dan に引用がある。

⁵ この4言語の「優先順位」は、その時々々のベトナムを取り巻く国際情勢を反映していて興味深い。Bui Hien, “Can day hoc nhung ngoai ngu nado trong truong pho thong Viet nam”, *Tap chi khoa hoc Dai hoc Quoc gia Ha Noi*, so 3, 2005.によると、1968年には第43TTg-1968号首相指示で「ロシア語、中国語、英語、フランス語」が主要な外国語とされ、1972年には第251TTg-1972号首相決定によって「英語、ロシア語、中国語、フランス語」が選定されている。

⁶ Bui Hien 前掲論文。

⁷ 近田雅博『近代ベトナム高等教育の政策史』、多賀出版、2005年、p173には「大学留学生は5人、中等職業教育の留学生が9人、在職の実習生が7人」とあり、「このときのミッションが、民主共和国(現社会主義共和国)における留学生派遣の嚆矢とされている」との記述がある。

⁸ 1955年には教育支援についての越ソ2国間協議が開催された。この協議では中等教育、高等教育レベルでの学生派遣を仔細に規定した。ロシア語教育に関する取極もなされた。

⁹ 一方、この時期ベトナム共和国(南ベトナム)における外国語事情は、1957年度まで中等教育がフランス語で実施されていた。英語が台頭する60年代半ばまではフランス語が優勢であった。

¹⁰ 白石前掲論文、p41。

¹¹ たとえば、モスクワのベトナム人学生は、留学生寄宿舎のうち「第5号館」に住むことが多かったという。“dom so 5”と呼んだそうである。(06年3月、旧ソ連留学生へのインタビューによる)

¹² 木村哲三郎「冷戦末期のベトナム・旧ソ連関係」『アジア研究所紀要』、亜細亜大学アジア研究所、1994年、p62。

¹³ Do Huy Thinh 前掲論文。

¹⁴ 06年3月、旧ソ連留学生へのインタビューによる。また、筆者がベトナムに留学していた93年当時に、ソ連留学から帰国したばかりの友人も同様の発言をしている。

¹⁵ 木村前掲論文、p83。

¹⁶ 小川和夫「アジアに回帰する資源豊かなベトナムー旧ソ連・ロシアからの輸入激減で経済開放に全力」『世界週報』1992年2月25日号、時事通信社。

¹⁷ 94年にはヴォー・ヴァン・キエット首相が若手政府官僚に対して、英語能力修得を義務付けた。また、筆者がハノイに勤務していた96年～99年当時のベトナム側カウンターパートナーの中にも英語能力が目覚しく成長していく人がいた。国際会議への参加や外国出張には英語能力の有無が考慮された。また、優秀な若手幹部には政府奨学金を得て英語圏に留学する人もいた。

¹⁸ Bui Hien 前掲論文。

¹⁹ Bui My Hanh, *Cau tao tu tieng Nga*, Nha xuất bản Đại học Quốc gia tpHCM, 2003.

²⁰ Le Duc Trong, *Ngu am hoc tieng Nga*, Nha xuất bản Đại học Quốc gia tpHCM, 2003.

²¹ Bui Hien 前掲論文、Phung Trong Toan, “Cac van de hanh chuc va viec giang day tieng Nga o Dong Nam A”, *Ky yeu hoi thao khoa hoc quoc te tai Ha Noi*, Trung tam van hoa va khoa hoc Nga, 2005. (原文はロシア語)による。

²² Phung Trong Toan 前掲論文による。なお、この数字以外にも国防省、公安省主管の大学においてロシア語が第1外国語あるいは、選択外国語として開講されている。同論文によると、学習者数は5680名である。

²³ Phung Trong Toan 前掲論文。

²⁴ 日本の文学作品のうち、ロシア語訳からベトナム語に重訳されたものもある。例えば、渡辺淳一の『無影灯』。

【参考文献】

小川和夫「アジアに回帰する資源豊かなベトナムー旧ソ連・ロシアからの輸入激減で経済開放に全力」『世界週報』1992年2月25日号、時事通信社

木村哲三郎「冷戦末期のベトナム・旧ソ連関係」『アジア研究所紀要』亜細亜大学アジア研究所、1994年

白石昌也「ソ連・東欧社会主義圏崩壊後のベトナムにおける世界と地域の認識ー「新世界秩序」と「地域共同体」をめぐって」『経済と貿易』167号、横浜市立大学経済研究所、1994年

近田雅博『近代ベトナム高等教育の政策史』、多賀出版、2005年

Bui Hien, “Can day hoc nhung ngoai ngu nado trong truong pho thong Viet nam”, *Tap chi khoa hoc Dai hoc Quoc gia Ha Noi*, so 3, 2005

Do Huy Thinh, “Foreign language education policy in Vietnam: the emergence of English and its impact on higher education”, *The forth International Conference on Language and Development*, 1999, http://www.clet.ait.ac.th/hanoi_proceedings/dotinh.htm. April, 22, 2006.

Phung Trong Toan, “Cac van de hanh chuc va viec giang day tieng Nga o Dong Nam A”, *Ky yeu hoi thao khoa hoc quoc te tai Ha Noi*, Trung tam van hoa va khoa hoc Nga, 2005（原文はロシア語）

【謝辞】

本件研究を進めるに際して、ホーチミン国家大学社会科学人文大学ロシア語学科のブイ・ティ・フオン・チー先生から助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。